

## コラム 79 — 幸福の扉が開かれた日

昭和天皇が昭和 22 年 6 月 11 日、兵庫県を訪れた際に、神戸市立第一高女三年生の岩國美幸さんが「幸福の扉が開かれた日」という題で、次のように書いています。

「あゝ夢にも想像せぬ、きょうのこの感激。青々と晴れ渡った空のもとに、奉迎の人々は、2 時間余りを今や遅しとお待ちしていた。・・・ 万歳！ 慈父を迎えて叫ぶ心からの歓声。 私はとどろく胸をおさえて、新聞記者達にすっかり取り囲まれながら、だんだん近寄ってこられる陛下を拝して、何んともいえない気持ちで胸がいっぱいになった。陛下の一行が私の前までこられたとき、5 体の機能が一時に活動を中止したように感じた。とたん陛下が私達女学生をご覧になって、私に『本は有りますか、長い間、待ちましたか、これからも一生懸命に勉強して下さいね』と、おっしゃった。感きわまって何にもいえなかったが、やっと精いっぱい心を込めて『はい有難うございます』と、お答えした。

陛下のお声はラジオの録音などでお聞きしていたが、じきじきのやさしいお声をお聞きして、理屈ぬきの日本人である伝統の血のつながりを強く強く感じた。そして今までのつかれもどこへやら吹き飛んでしまった。・・・ 今から考えると、こんなにも国民全体が尊敬し、おしたいしているお国の大親より、じきじきのお言葉をいただくなんて、私は何と幸福なことだろう。どんなことがあっても、一生あのおやさしいお声をお忘れすることはできない。・・・ 私たちは希望と光とが取り囲んだ新しい世界へ出発したのである。そして未来には、かならず成功がまちかまえているだろう。6 月 11 日、本当に光栄の日、感激の日。 一生記念すべき日、そして幸福の扉が開かれた日である。」